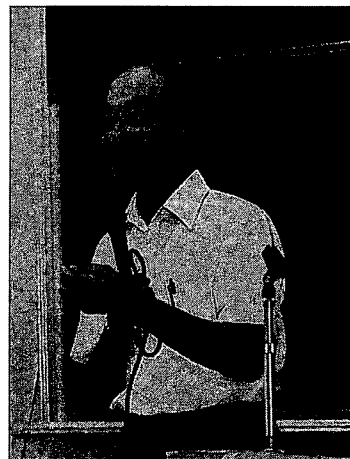


【講演2】下久堅・柿野沢の集落複合経営

【講師】宮内博司（みやうち・ひろし） 飯田市下久堅 昭和6年生まれ

宮内：こんにちは。紹介をいただきました宮内であります。こういう大学の教室をお借りしてのお話は、なんとなく教授になったような気持ちになるのですが、私はまったくの農家人です。話がうまくいくか分かりません。



1. はじめに

前段の長谷部さんとは同じ久堅村、長谷部さんは上、私は下という関係で、昔は、江戸時代の柿野沢村、柏原村など6か村が明治維新後に合併して久堅村になったのです。その後、上、下に分かれました。でも、ご承知の交流は国道も1本ありということで非常に懇意にさせていただいています。菩提寺は上久堅の地籍にありますので、お寺参りをしたりと、上下久堅がお付き合いをしていると地域柄であります。

また、先ほど来お話がありました10月の25、26日、私たちの方へお出かけいただける機会がありましたら、おおよそ松本平とは違った山間僻地であります。そんなことを承知しながら、ご参加いただけるとうれしいなと思います。

じつは、4日前になりますか、松本ハイランド農協の皆さんがバス2台でもって研修に来られました。松本平からなんでこんな私たちのような山の中へということなのですが、そのときに話に出たのは、松本平の皆さんは経営とか集落地域づくりについては、それぞれ地域の特色があってしかるべきということが、冒頭に組合長さんからお話がありました。それは確かにそうだと納得をしまして、気楽に充分時間をかけて、お帰りいただいたという経緯があります。

そのときに私たちの方で、後からもまた触れさせていただきますが、下久堅ですので「ひさかた御膳」という料理を作り、地域のおばちゃんたちが、それこそ肉や魚はスーパーで買ってそれぞれの家庭で味わってもらう、私たちは自分の地域で作った農産物を調理しながら味見をしていただく、ということをやっているんですが、これが意外に私たちの地域づくりと、地産料理とかいうことで非常に好評を得ました。大きいことを言うわけではありませんが、全国の北は青森県、南は鹿児島県の県庁の職員の皆さんまでも料理を上げていただき、つい先だっては四国宇和島の市役所の職員さんにお出でいただきました。

私たちはそれを売名、地域を売るということではなくて、みんなの意気込みでそれぞれの皆さんが、いろいろ実証されているんだということを今までやってきたこと、現在こんなことをやっているよ、将来はこんな格好で行きたいもんだな、という三段階に分けてほしいお話をしてみたいなと思います。

2. ムトス柿野沢の紹介

私たちの集落は柿野沢という地名です。下久堅には7つの集落があります。そのうちの一つですが、大きくもない、まあ中間的な、人のまとまりやすい規模です。昔から先人・先輩たちが営々努力をして築かれてきた地域であるというふうに思います。今日の題材は地域づくりと人づくりということでありますので、私は絞りたいのは、小さな地域であっても、農、土があるならそこから食、

安心安全な食物を得ることによって自分の命を確保できる。それから、これから先の子供たちにしっかりいろいろなことを担ってもらいたいなということで、地域全体をまとめて地域づくりをしていくことが一番のポイントではないのかなとということです。

最近の情報などを見ていまして、もう大きな農家の皆さんでも、小さな農家の皆さんでも、それぞれの悩みがある、また夢もある、期待もする、等々ありますので、それはそれで個人のものの考え方によると思います。全国どこへいっても、町おこし、村おこし、人づくりといわれますが、私たちもその一端を担って行こうではないかと申し合わせをして、現在も活動しています。

それぞれの地域にはいろいろな組織があります。たとえば、私たちの飯田市の場合、自治協議会とか、町づくり委員会とか、いろいろな組織ができていますが、両方をひと絡めにしまして、家で一役、二役ということが必要になってくる。お母ちゃんたちがあれば、お母ちゃんは婦人の組織に行く、お父ちゃんたちは父ちゃんの組織、みんな関わりを持ちながら、食事時だとか休憩時とか、そういうときを利用してやっていけばいいのかなと、まあこんなふうに思います。とにかくあまり肩肘を張ってしまいますと、ものはうまくいかない。だから柔軟にといいますと語弊がありますが、できる時にやるといった関係で地域をつくっていききたいと、そんなふうに思っています。

と同時に、私はいま集団営農ということを考えています。私たちは山間地で450mから650mの標高差のある地形で、それこそ営農もし、家の賄いもしというような格好で暮らしています。自分たちの集落で生きている人たちが、自分たちでできることをまず大前提とします。それから計画を立てたときに、これだけは自分たちでできるけれども、そこからはみ出すものについては、これはいよいよ行政の支援をお願いするか、智恵を貸していただくとかということです。最終的には自分たちが生きることによって地域を守るんだという、基本方針は昔と変わりありません。

私たちの集落には、語り伝えられているいろいろなことがあります。これは先輩たちの努力の賜です。私ももう後期高齢者のじきヨボヨボになる人間なんですが、健康であるかぎりには頑張りたいなという気持には変わりありません。さあそうなりますと、やはり先輩たちは頑張ってきたなということを、この年にして改めて思い知らされることばかりです。この件については後ほど話したいと思います。

私たちの柿沢集落は「ムトス飯田事業」に採択されました。これは松沢元市長が玉井先生のお話に感銘されて、パイロット事業として飯田市内に普及したものです。「ムトス」の由来は、広辞苑の最末尾の言葉「んとす」を引用したもので、「何々をセムトスル（しようとする）」という言葉の意味を、自分たちの住んでいる地域を、皆が愛着をもって住めるような地域にしよう、活気があって明るく住みやすい地域にしようといったような、まちづくりへの意志力を表した言葉として使用しているものです。

3. これまでの地域おこし

まず最初に、私がなぜ村おこしとか地域づくりということに執念を燃やしたかということに、ちょっとだけ触れさせていただきます。私は戦前っ子でありましたので昭和20年の8月15日に終戦になりました。そのときに親父は42歳でありました。親父は教員をしておりました。そしてやがて戦争中からの無理がたたまって、茨城県にあった加藤完治先生の内原訓練所（満蒙開拓青少年義勇軍訓練所）で、当時でありましたので猛訓練を受けて、帰ってきて青年教育、それから小学校の教員、もうそれこそ夜討ち朝駆けくらいの努力をしましたが、やはり病魔には勝てませんでした。それで42年にはあの世にいつてしまいました。その1年の間に私の母ちゃん、それからお祖母さん、わが家の大人たちは3年ばかりの間にパタパタと死んでしまいました。昭和22年、そうしますといきおい長男の私のところにすべてがかかってきました。親戚の付き合いから、近所の付き合いから、それから弟や妹たちがいるんで、その面倒をみなければなりませんでした。そうなったと

きに、いやこれはえらいことになったなと感じたのが本音です。親戚縁者のお手伝いもいただきました。近所のお手伝いもいただきました。

そうやってみたときに、そのころは感じませんでしたけれども、やはり昔からの組織に助けられていたと思います。徳川時代に五人組という組織がありました。近隣の5戸前後で構成され、年貢納入や治安維持などに連帯責任を持った単位ですが、それが今の集落づくりの元であったというふうに理解できます。それは冠婚葬祭単位のひとつの小組合がありました。それから私たちでは、糸偏の結ぶ、結（ゆい）という、制度ではないんですが、ごく自然に地域を支えあう、たとえば雪が降ると雪かき、春先になっての側溝のゴミ上げ、というようなこともみんな自分の手でやってきたわけでありました。それを今の時代になりますと、やれ側溝にゴミがからんだ、落ち葉がからんだ、行政でする仕事、というように他人に依存をしてしまう。簡単に依存ができてしまう、というような時代になってきたと思うのです。ですけれども、そのへんをいま一度全国の、全国のというと大げさですが、経済成長も失速してきた最近のことですので、ある程度自分のものは自分で始末をする、ゴミが出たら自分で始末をする、というような基礎的な、昔ながらの守るべきものは守っていかなければならないと思います。

もう一つはいつも考えるんですが、当たり前のことが当たり前としてできない世の中になってしまったなというふうに思われます。ですからいま申し上げましたように、自分で散らかしたものは自分で拾う。空き缶ポイではなくて、他人が捨てたものでも自分で拾って一緒に始末をしてあげる、というような気持。ということを考えてみますと、これは釈迦に説法になりますが、やはりそういうことも大事であるな。というようなことで、いちいち拾い上げていったときに、自分の地域づくりというのが考えられると思うのです。これは皆さん方また適当に解釈していただければいいと思います。

それからもう一つは、そうはいいまして、私たちの戦国時代からの集落に二つのお宮があるんです。お宮さんが二つあるということは、自分の集落のお宮さんですので問題はないんですが、これは一集落全体の産土（うぶすな）様があったんですが、大正7年10月4日の宵祭りに、本祭りの前夜祭でもって余興をやっていたら、提灯に火が付いてあっという間に焼けてしまったんです。それ以来、そのお宮さんをまん中に移そうという運動が集落の中で起きたんです。ところが、やはり古来の人たちの思いがあるので、年寄りたちから反対論が出てきたんです。お宮さんは規定の場所でいいじゃないか、というようなことでありましたが、刑事事件まで発展をしました。

これではいかんということで時の青年たちが、なんとかまん中に施設を置こうじゃないかということになり、賛否両論がありましたが、まん中に移すことができたんです。けれどもそれは神社庁に登録もできない、無資格社なんです。そうしましても、やはり昔からイワシの頭も信心からといわれますが、分けた地区の皆さんはそれを大事にして現在でもお参りをしています。

従来からのお宮さんがあった地区の皆さんも、できたものについて何もいうことはない、これを一つの契機にして、昔からの地域がまとまることの方が大前提だということで、それから公会堂づくりが始まったんです。これは昭和になりました。昭和10年の11月に着工したんですが、そのときも青年たちが頑張った。たまたま12年に日中戦争が始まっていますが、その年の2月に完成をしています。そのときの資料もきちんとしてあるのですが、そういうことがいま現在私たちの集落で守っておれるところの地域づくりの原点なのかなというふうに思います。

次に、「ひさかた御膳」の前身について話します。兵隊さんに取られた家庭になりますと、お留守居はもう山の中を耕して、本当に獣道しかありません。大きな道也没有。荷車がやっとやっとの道路でしたので、それを伝って農作業をするのは、残された老人と婦女子です。そうなったときに、当時の愛国婦人会、国防婦人会が、共同炊事を始めたんです。それも今様のメニューを並べたものではなくて、本当にお昼時のライスカレー、または煮込みのできた煮物とか、その程度のものなんですが、私も子供のころその施設に手鍋を下げてもらいにいったものです。ですから、そ

んなようなことからなんとなく婦人たちのまとまりもできてきましたし、地域づくりをしようとする若い人たち、年寄りたちの考え方も統一したものの考え方ができてきたことは事実なんです。それがいろいろ功を奏しまして、現在まで積み上げられてきました。

やがて、話は飛びますが、8月15日の終戦になりまして、兵役を解かれた青壮年の皆さんが復員をしてきました。450人までも集落の人口は膨れあがり、本当に食べるものもない、どうして生きるかということの迷いのあった時代でありました。そのときに、兵隊に行って戦争を体験した若い人たちが、これは、食糧増産をするには道を造らなければ話にならない。ということになって道づくりを始めたわけなんです。まず集落でもって、自治組織のある地域の区会とは別に、道路委員会というものを起こしました。道路委員会で何をやるのということになったときに、ひとつ年次を決めて柿野沢じゅうに道を造ろう、せめてどの家庭も普通車の入れる道を造ろうということで決まりました。集落に、それこそ今の言葉でいうと合意形成がされた、というようなことで出発ができました。21年の4月だったと思います。

そのときに私も本当の若輩でありましたが、21年といいますと17歳でした。旧制中学の3年生です。大人の皆さんたちに混じって大人の会議に出るということになりますと、大人的な考え方も家に帰ってくるとみんなに伝えていかなければならない。それから各集落の話し合いにも、それに参加しながら同調すべきものは、といっても同調できるできないの問題もあります。そういうふうに決まったのであれば、そういうことで調整をしなければというような考え方が自然に自分の胸に落ちてきた。まあこんなふうに考えました。

とにかく集落内に赤線とある路線、それから獣道もひとつの路線として、1万2千mというものを年次を分けて造り上げようではないかということで出発したわけです。今では用地買収もみんな国や県や市でやってもらえるんですが、当時は潰れ地は全部無償提供、それから労力も自分たちの労働で、スコップにショベル、モッコを担いでということで、秋の取り入れが終わってから翌年の3月31日までは、道路作業に明け暮れました。私も本当にえらい訳のもんだなと思ったんですが、お隣の人もやる、こっちの人もやるということになれば、みんなやらざるをえない。やらなければ、自分の畑や田んぼに通う道がない。収穫したものを出荷することもできない、ということで努力を重ねた経緯があります。

道路委員会というものは現在までも続いております。下伊那の下条村では資材支給という制度が村にできて、工事資材は行政で支給して賦役は自分たちでしてという制度があります。ただ1万2千mのうち広域農道が1本通りましたので、1,950mというものは初めて用地買収を受けて工事も行政でもらいましたが、残りの1万50mは実質的な個人負担の道路であります。今では4トン車も入る幅2.3m、2.7m、一般農道の道幅の道路です。

その中でもまた1本、1,150mの県営で開けてもらった道路がありますが、これは幅4mの道を確保できました。ところが450mからちょうど中間の550mくらいまで4m幅で開けるんですけど、非常に急勾配の10分の1勾配の急傾斜道路です。さあ、それを1本開けることによって私たちの通学・通勤、郵便局・農協・支所等々へ通うには非常に簡便で一直線な道になるんですが、計画を本庁に回したら、村の自治協議会で却下されました。あんな山の中にそんな大きい道を開けてなんになるの、あれは郵便屋さんが歩いて郵便を配るだけの道でいいじゃないのと、全体会議に私たちもでたのですが、そう言われました。

これにはいささか頭に來ました。結構であります。受益者12戸だけで1,150mを提案しましたが、お金がいくらかかるのといったら当時6,000万円でした。昭和53年でしたが、よしわかったと。よし自分たちだけ12戸でやろう。その代わり自治会費も納めないし、道路が完成するまでは、納めるべきものも納められないときもあるかもしれない。ということで本当にムシロ旗を上げたくらいな勢いだったんですが、それが逆な面の効果がありまして、自治会の会長さんがこれはえらいことになったと、これはしっかりフォローしてやらなければいけないなというようなことで、前向

きにものを考えていただいて、道路が1本開くことが決定したんです。

ところが、さあ測量といったときに、もちろん自分たちで測量の協力はできるが、技術がありません。ただ、やはりそれを見かねた、当時は合併していましたので市役所の農林課の職員、係長以下6人で入ってくれてその1,150mを測量してくれました。3日間かかりました。できたものを県議を通じて県会に出しましたところ、やあこれは大変なことになりそうだということで、木曽の方から同じ格好の団体営の要望が上がってきているので、それと競争になるなという話にだったのですが、当時でありましたので県議の先生の力があつたのか、なかったのかそれは分かりませんが、いずれにしても予算枠がとれまして、それも本当に6年間で舗装工事まで完成することができました。その代わり県が加わり1億2千万円、当初の事業費から倍の経費がかかりました。けれどもそれに自信をつけて、よし、これができたんだからもっと本気になってやろうじゃないかということで、私たちも精一杯の努力をしました。集落の皆さんの協力もいただきました。そしてこの事業は農林省の補助事業でもありました。

そしてもう一つは、これができたら40歳から50歳くらいの若い人たちが、非常に草地が多くて畦畔も広いというようなことから、酪農をしっかりと進めようということで、乳牛の導入も始めて地域をおこそうじゃないかと、盛んに酪農が集落に増えました。

昭和50年代の中ごろから、上の関係の草地造成はできてきましたが、その中間から下がいけないのではないかということで、これを平地にすることで柿野沢全体が基盤整備としてできてくるんだということの目安を立てまして、そのときに一筆調査をしたり、それから各戸のアンケートを取ったりしてやりました。いろいろにして、団体営の道路が1億2千万円、それからいま申し上げました酪農をするための草地造成（畜産基地造成事業）が6億8千万円をちょっと切るくらい、それから昭和50年の末から入りました新農構（新農業構造整備事業）に4億1,500万円ということで、都合11億円という農林事業費が私たちの柿野沢集落に入ったんです。

よくしたものでやる気というものは、全戸が本当にやる気になったということは、柿野沢の集落は全戸が負債を背負っているんです。だから、お互いに助け合いの精神が生まれているんです。互助の精神。たとえば、戦死をされた戦争遺族の家庭で奥さんたちが頑張って小さな子供を学校に出して、というような家庭の皆さんなどにも温かい手をさしのべるというような助け合いの精神も、なんとなく身に付いてきたというふうに思います。頑張って、頑張って、頑張り抜きましてお陰さまで、その11億円の農林事業費にも平均して最低10か15%の自己負担が付いてくるんですが、それもよくしたもので農林資金を借りてやってきたのですが、2年間の据え置きと13年の償還で、本年の10月20日の日には全部償還ができてしまうんです。それも1軒の滞りもなく。いよいよ柿野沢のいろんな意味での集大成で、なにかのお祝いをしなければいけないのかなと、いま現在皆さんの役員会でいろいろ討議がされているところであります。

はじめの前置きが長くなりましたが、やはりある時期は苦勞して、それからみんな同じ歩調で進んでいくというのは地域づくりの原点であり、そうして道路ができれば自然に農地の整理・整備もできてきます。これを原点にします。けれども最近の農業情勢は、消費者の皆さんもお分かりと思いますが、なかなか輸入攻勢やらでうまくいっていません。うまくいっておらないけれども、農地があるかぎり、農地を耕さなくては国土がまるでいけないことになってしまう。だからこれを少しでも消費者の皆さんにご理解をしていただくというようなことから始まりまして、昭和58年からだったんですが私たちの場合は、兼業農家の育成もさることながら、都市交流、消費者の皆さんとの都市交流も交え、農地を活かしていこうじゃないかということで、方向が決まりまして現在進行中です。

この件につきましては、島根県の出雲大社からわずか12、3kmのところの神代（こうじろ）地区（現雲南市）の視察を行ないました。いやじつに、微に入り細に入りの経営をされていて、その神代地区の視察を参考に、現在私たちは集落営農という組織をそこに初めて興しました。私たちの

地区の集落営農、たとえば松本平の方も飯田市の場合を見ると、足助さん（愛知県足助町）もそうなのですが、中山間地の直接払い制度、これは水田の場合で2万1千円が1年間に国から下ろされるお金なんです。これは税金の還元金、励まし金といいますか、取り方はいろいろありますが、そんなことで奨励金としていただく。

けれども私たちはその税金の見返りのお金をいただくので、本来は各個人へ分配しなければいけないお金なんです、これをできるだけ自分たちの集落のために有効に使う道を研究しました。そこでいろいろの案が出てきました。それは国からの還元金なんだから分けて使えばいいじゃないかという意見も大半でした。けれどもやはりそうでなくて、これから先どんなに世の中が変わっていくかわからないけれども、それを全部共同利用積立金としていま積み立てています。積み立てていくだけでなく、もうそれを私たち集落は農家も、非農家も、まったく全部が平等に、集落で生活している者は平等に恩恵を受けるべきではないかという考えがありますので、その考えのもとで進めています。

ただし、そこに中心になって働く人がいないと、山間地の農地は守れないということで、水田の大半を受託農家、たとえば、うちはもう高齢者で水田はできない、だれか作ってくれる人があれば、地を売るといことは悲しいけれども、だれか借りて作ってくれる人がないかな、というような意見が多く出てきて、その場合には委託を受ける担い手農家、これが必要だということで、希望を取ったところが40歳代が1人、50歳代が3人出まして、4軒の受託農家ことができました。それに対していま申し上げました直接払い制度と、県の農業資金の方でお金が入るとい話を聞きましたので、その一部を借りたりして、まず籾播きの機械、それから4条植えの田植機、これを2台購入しまして、それを担い手の農家に全部機械は預ける。お金は組合の方で出すが、機械の保守管理をしてもらう、というような格好に現在もしております。

そうしますと仲間の機械というものも、個人に管理委託をしますときちっと保守もし、油差しもきちっとできているということがありまして、普通ならば5年ないし8年くらいで傷んでくるものが、10年も15年も保つてはないのかなと、現在みんなでうれしい話をしているんです。一応はうまい格好で集落営農という組織は回転をしております。

それから集落営農の水田の合理化ができたことによって、労働力も浮いてきます。浮いた労働力で畑地をうまく活用して、野菜などを作って出荷する。たまたま無人販売所が2か所ありますので、1か所はちょっと細まりましたが、1か所はしっかりやっています。つい先だったのお盆なども、盆花の売れようといったら、本当に売れて売れて、追加追加で荷造りをするおばちゃんたちの方が忙しいということになりまして、当然売上金も伸びますし、よかったな、ありがたいなと今も思っているところであります。

なかでも、農産物の関係ですが私たちの集落には、リンゴとかナシはないのですが、柿と梅はあります。最初のうちリンゴ農家も気力があったのですが、やはり年を取ってきますと20kgのコンテナに収穫した果物の上げ下げ、それから出荷、荷造り、これも大変な作業です。ですから今は干し柿、ご承知のように干し柿が非常に現在は好評ですので干し柿と梅の出荷、梅なども一時期は中国や台湾からの輸入の問題で単価が落ちたんですが、またぼちぼち値上げの傾向になってきました。干し柿は果樹のなかでは一番いいんですが、干し柿も厳密に計算してみますと、経費、特に経費のなかでも労働力が、時期的には冬場の仕事で問題はないんですが、私も家で作っていますがこれもなかなか大変なんです。やはりそのへんのところも研究をしていかなければいけない点です。

最近是新規就農者で干し柿の生産をされる方もありますが、それはそれで頑張ってください、地域の土地を活かすということが基本的な仕事としてとらえていただきたいと思います。また今後、少子化はしょうがないとしても、高齢化は避けて通れない。そうなったときに農業をしたくなくても、しなければならない家庭が多くなる、という問題が生じてくると思います。本当に本気になって土地利用を考えていかなければならない時期がもう間近に迫ってくるような気がしています。

そうはいっても、現在のところはやるだけはやっていくより、ほかに手はないというところでは。

先に申し上げました糸偏の結ぶ、結（ゆい）が必要な時期になってくると思います。始めに話題に出したのは、昔柿を収穫するにも、もぎ取り自体は若手にもぎ取ってもらう。それを皮をむいて吊るす、乾燥させる、箱詰めして荷造りをする。このライン化が冬場の大仕事になってくることは目に見えています。ですのでそのへんの解決を1か所に集中して、柿をむく、決まったところで干し上げる、干したものを規格に添ったものとして、製品として有利に販売できるような仕組みも考えていくことが当然重要なことだと思います。

いずれにしても、農業として土地を活かすかぎりは、やはり今のような複雑な社会をどのようにしてやっていかなければいけないのかなということに、非常な悩みを持つわけですが、やはりそれはそれで、それぞれ地域の智慧、地域づくりのひとつの一環として頑張っていくよりはかない。そのように思います。



4. 現在の活動

現在の活動はまず公民館の活動から始まります。先ほど長谷部さんから話がありましたが、私たちもこの飯田市の公民館活動というものは、非常に強いものであると、私自身も感じていますし、これはこれから先もしっかり守っていかなくてはいけないと思います。特に最近考えられるのは一つの学校、下久堅の小学校の6年生までの子供、それから公民館活動はもちろん、それに関わる地域住民、それが三つ巴になって地域の公民館活動をエンジョイしていくということが、最終的な人づくりにつながっていく、まあこんなふうに思います。

だからそのへんがうまくいかないのはだめだと思いますし、ややもしますと、それは今の社会です。若い人たちは外へお勤めに出なければならない。出なければならないのですが、それは四六時中出るわけではないので、たとえば夜の会合など出られるときにはしっかり出てもらって、内容をよく知ってもらう。知ってもらうそのうちの何十分の一でも協力しあえるような、精神的なお互いの支えになるようなものはつくっていかなくてはいけないのかなというふうな気がします。

ですからそこらへんのところは、私も老婆心ながら若い人たちにもちゃんとやるべきものはやる、手を抜くときには抜いてもそれはやむ得ないけれども、そういうことも必要だ。わが家では孫が3人おりまして、もう上は大学を出まして就職をして、市内の保育所に保育士として勤めています。2番目はいま大学ですが、3番目は女の子で高校で頑張っています。家の後継者はどうなるか分かりませんが、まあ3人のうち1人くらいはやってくれるのかなということも、家の中で話をするのもチームワークをつくる一つの手だと思ってやっています。

たまたま、いま下伊那農業高校ではアグリ生活科、その子供たちが調理実習に私たちの柿野沢に入るわけです。柿野沢に入って本当に集落の「ひさかた御膳」の勉強をします。もちろん担任の先生も付いてきてくれるわけですが、昨年からは始めまして本年は2年目でアグリ生活科の生徒が2クラスになりました。そうしますと、それを私たちの集落で受けることになりますと、半日ずつ仕切っても4日かかります。学校の方ではそれはいいと、「南信州広域圏の地域づくり」に関わるからだからやりましょうということになりました。

それから「南信州」ではセカンドスクールということをやっている、国の5つの省の指定をもらって、実施する仕組みで出発しました。これも大事なことであります。それから、高校の先生から、「やがては卒業していったん外へ出て、将来は飯田市に帰ってきて頑張ってくれるような若い人をつくりたい」というようなことを言われ、話の終わりにはそのことを地域の皆さんから言

ってほしいというような注文を付けられました。ですから、得たり賢し、私もそんなことで一言ずつ申し上げております。

それからもう一つは、南信州には加工開発連絡会という組織があります。私たちのようにいろいろ農産物の加工、出荷、販売等々をしている集団が、南信州にはいま現在 23 集団あるわけです。それがまとまって活動をしています。それは定期的に市内のアピタとかユニーとか、あるいはこの秋には県の南信農業試験場でイベントがあるんですが、そんなようなところへの出荷販売、千葉県の幕張メッセ、新宿の地下街、というような格好でそれぞれが製造したものを販売に出るわけですが、これらは非常に売上も伸びております。たまたま市内のスーパー、アピタとかユニーでは同じ品目が山と出るものですから、われわれの出したものがそうそう売れ行きがいいというわけにはいきません。けれどもなにがしかの売上にはつながっているということです、これからも頑張っていきたいなと思っています。

それからもう一つ、最近できてきたことは、愛知県の A コープと提携ができて、1 人の専任職員をつけまして愛知県へ出荷販売もできることになりました。さてそうやってまいりますと、分県問題だけでなくいろいろな問題が長野県下にもあるわけですが、私たちは東京にいろいろ品物を出荷するにしても 4 時間の輸送時間がかかるわけです。ところが中京圏、名古屋を想定したときには 2 時間くらいで行ってしまうんです。そうすると出荷経費も少なくなるし、たとえばどんどん売れるということになれば、1 日にピストン輸送もできるのではないかとということも考えますと、今すぐどうこうというわけではありませんが、将来は中京圏を目指した農産物の販売も、一つの射程に入れて考えていく必要があるのかな、当然そんなことを考えます。もっとよりよく長い目で研究していくことが必要と感じています。それから、名古屋の場合はいま非常に勢いがいい、現在は勢いがあるということで、いままでは行政を中心にして東京一極集中ということでしたが、ぼちぼちこれも方向が変わるのかなというふうに思っています。

一時期ですが、松本平で降旗市長さんが中心になって新産業都市を打って出られて、本当に頑張った時期がありました。皆さん方が恩恵を受けられたと同じことで、これから私たちもそういう意味で南信州を、なにも何かを絶対に壊すということで申し上げているのではありませんので誤解のないようにお聞きをいただきたいと思います。長野県のなかでも南信州が元気になっていくことが、これも長野県を良くする一つの手だてというふうに考えていただければ、OK をいただけるのかなと思いますが、とにかく頑張れるところまで頑張って、やるべきところはやって、それから前に進むという心構えも必要かなというふうに思います。

ちょっとここで話がかかりますが、「現在の活動」の中で、「県外からの中学生」、小学校は東京の渋谷、あとは大学が一、二あるだけなんです、県外からの中学生を私たちの集落では平成 8 年から受け入れました。今は観光公社なるものが、中央高速の料金所を降りたところに「リンゴの郷」という所があり、そこに観光公社がありますが、平成 8 年までは市役所の観光課と農政課が主体でやっていました。そのとき私たちは初めて県外の学生たちの体験を受け入れしたんです。

どんなことをしたかといいますと、メニューとしては、やはり「ひさかた御膳」をやっていたので料理体験、五平餅を中心とした料理体験、それから果樹の関係の摘花とか摘み葉とか、そんなような体験です。これは多治見市の中央看護学院の学生約 125 名を第 1 回に受け入れたのですが、一挙に 125 名は大変でした。けれどもこれが大きな経験になりまして、以来、その翌年からどんどん受けるようになりまして、最高のときに平成 15 年には 800 人余が入ったと思います。そのときに、これは大仕事ではあるけれども、夢のある仕事でおもしろいなという感想が女性の皆さんから出ました。

それ以来、現在は観光公社で一切を取り仕切って、いま南信州に年間 5 万人、それから学校数では中学校で 22 校入っています。飯田市のインストラクターを控えた受け皿となるメニューは 200 種あるそうです。ということで、いま私たちは、たとえば食の体験では五平餅、餅搗き、それから

タケノコ掘りだとか、草鞋をつくってみるとか、紙を漉いてみるとか、というようなことで、いろいろなメニューを中学生の希望によって、分類をしながら増やしているんですが、けっこう喜んでもらっています。

県外から2泊3日の日程で中学生が旅行に来る場合、おおよそ4万5千円から5万円ほどかかるそうです。そうなったときに、私たちのインストラクターに落としてくれるお金もそれ相応にあるので、これは農家の副収入として、積極的に受け入れをしております。

それからもう一つ、一番大事なことは、「昔とったものは必ず栄える」。これは愛知大学の岩崎という先生が分析をされました。私たち下久堅では紙漉き産業が非常に多かった。障子紙です。昭和36年の天竜川を中心とした災害までは、紙漉き産業もあったんですが、災害の後復旧の工事に出る労賃の方が、紙漉きをするよりもいいというようなこと、これは最近では障子紙を貼る家庭が少なくなった、などで減りましたが、いろいろの関係で需要と供給のバランスがばちばち和紙を通じて、まだ急にはいかないでしょうが復活してきたというようなことが情報として入ってきていますので、私たちの地区では小学校に2つの和紙工房を受けてもらいました。学校の教室で2つ、公民館で1つということで、たいへん教育効果もあり、その整備も整い、よろこんで子供たちも自分で漉いて、漉き上げたものを使っています。

小学校6年生の卒業証書、これも2月末から3月の初めまでに漉いて、それを乾燥させて、誰の太郎兵衛と漉き上げたものを校長室に持っていく、校長先生はそれに墨で書いて卒業式に渡します。これはひとつの笑い話ですが、教育委員会に下久堅小学校の校長先生の人事異動には、毛筆の上手な先生でないとおさまらないんだよというようなことを言われています。

さて経済行為ですが、私たちの経済行為としましては、まず無人販売で年間300万円くらい、1点100円のもんです。それから味噌を作っておりますので、これは母さんたちの手作り味噌で、一般の市販よりもちょっとお高くて1kg600円なんです。ですが中の麹菌は、灘の酒で有名な兵庫から酒の菌が入っています。ですから白っぽくてちょっと甘口の味噌です。そんなことで非常に効果が上がっております。年間4tを製造しまして、東京の世田谷の関係、渋谷の関係、それから県内はもちろん長野・松本からも注文をいただいて、もう固定のお客さんができました。ですから5kgから10kgというように送っています。

飯田市の街の中の皆さんにも当然供給はさせていただいていますが、もう自分たちで豆も作れなくなってしまう、本年は豆の値段が高くなってしまって、種子が30kg2万1千円なんで、去年の倍です。そうなりますと、遺伝子組み替えの豆が入るかということですが、私たちはそれではダメだとこだわっているんです。もう中国はどうにもならないということでカナダから入ってきますが、陸揚げして工場を選別するときに小指の頭ほどの砂利が混じっているそうです。そのふるい分けなどの作業に大変な労力を使うそうです。そういうことを聞いたときに、やはり大豆も一般の素人も合わせてその栽培について研究していかないと、今は機械精度が良くなったので、ドレッシャー（粉碎機）で石も含めて粉碎してしまうのではないかと、凍り豆腐を造っている会社の皆さんは心配をしております。ですから将来のためにも安心安全な、米作りももちろんですが、大豆も自分で作っていく必要があります。

現在、飯田市には最中とか、羊羹とか、生菓子を中心になってやっておられるところが、12戸ほど大きな菓子屋さんがあるんですが、さて小豆がもう北海道ではほかの作物に取られてしまって、小豆の産地が九州へ行ってしまったということを言われます。さてそうなってくると、いったい日本の国の生産物の流通はどうなっているのでしょうか。これも心配の種。先行きどうなるかわかりません。ともかくそれはそれとして、自分たちの地域でできるものはきちんと作っていかなくてはならないのかなというふうに思います。

それから、コミュニティー・文化活動とかいろいろ行っていますが、私たちは先ほども申しあげましたように、まず下伊那農業高校に生徒たちが入ってくれて、勉強してくれて、やがて後には飯

田の地に戻ってくれて、それから農業をいささかでもやってもらえるような仕組みが、一挙にできなくてもだんだんにできていく時代になってほしいと願うものであります。

それから、いま小学生に言っているのは、小学校の高学年の子供たちも柿野沢で料理体験をしますが、この料理体験が意外に好評でして、家では包丁は持たない、箸もろくに上手に持てないという子供たちが柿野沢に来たら、おばちゃんたちに教えてもらった。「あれ、お箸の持ち方が上手になったね」とお母さんにほめられた。等々やっておりますと、いろんな意味でいい体験になっているのかなと考えています。

5. 今後の課題

それから、最後になりますが、そうはいっても自分たちはこれから先どのような格好で生きたらいいのか。ですから冒頭に申し上げましたが、子供たちに元気でやってもらうためには、自分たちも元気でやっておるさまを子供たちに大いに理解してもらわなければいけないということで、なるべく子供たちと多く接する機会をつくろうということで今やっています。ひとつは、1年の一番最初第3日曜を目標にしていますが、子供たちを交えた区民新年会、それから夏の7月の初めにやるホタル祭り、それから秋の地区の大運動会、この3つに焦点を絞って、もう大人たちも老人も子供たちも、保育園の子供たちも一緒になってやってみよう、というような格好で進めております。ですが、新年会には子供たちはどうもやはり足踏みをしてしまう、ホタル祭りと地区の運動会だけは本当に大勢でにぎやかにしています。それはなぜかといいますと、ただ簡単な慰労会・反省会をしますが、大人も子供もみんな一緒に地区のセンターに入ります。そこで成果の披露などを全体でします。慰労会もそれぞれの趣向を凝らしてしますが、アルコールも回るようになってきたときにころあいを見計らって、用意したものを渡して子供たちはこのへんで解散よ、ということでそれぞれ家に帰します。

というような仕組みでやっていますが、子供たちはお父さんやお母さんはあんな格好で飲んでるんだなということが自然にわかってくる。そういう仕種、礼儀、いま礼儀ということを申し上げましたが、私はこのことについては本当に痛切に感じるんです。いまの小さい子供たち、私らの小さいときには礼節を重んじよということを言いましたが、いま礼節と言ったってピンとこないと思います。けれども、朝の「おはよう」、帰りの「おかえり」「ごくろうさま」「おやすみなさい」、これらは当たり前としてもう習慣つけられている。地域づくりの原点はそこから始まる、というふうには私は思っています。ですから。どんな職場に行っても、どんな社会に出ても、第一印象が良ければ「ああ、あの子は礼儀正しいぞ」、悪ければ「あれはだめだ」とレッテルを貼られてしまう、だと思ふんです。

ですからこれは100%そうあるかどうか分かりませんが、そういう日常のところから、先ほども申し上げました、当たり前のことを当たり前としてやっていくことだけやれば、なにも片意地を張って四角に頭を振らなくてもなんとか解決していけるものであるなというふうに思っております。ですから最後の、自分たちの家に、子供たちのために、それから将来に望みを持つ、夢も必要だ、自分もやれるだけ頑張る、というふうに思っております。

それから最後になりましたが、大半のおばちゃんたちが関わっている「ひさかた御膳」の仕事なるものが柿野沢の集落営農に大いに意味をなしておる、というふうにご理解をいただきたい。だからみんなで農作物を作った。作ったものを大半のおばちゃんたちがそこで味付けをして、おいでいただけるお客様方に召し上がっていただいて、「美味しかったわ」と言っている記録簿に書き残していただける。書き残していただいたものに後でおばちゃんたちが目を通して、いろんな方たちがこんなようなことで喜んでいただいたんだな、なお私たちは努力しなければならない、というような心構えもできてくると思うのです。

さて、このようになるまでには駒ヶ根のグランドホテルの Cock 長さん、今は専務さんになられましたが、ご指導をいただきました。それから全国中央農協会の方のご来飯もいただきまして、いろいろ勉強をさせていただきました。とにかくお金をいただく以上は、いくら農家レストランといっても、食品衛生法に基づくきちんとした衛生管理、それからもてなすわけですから、人様に「よかった」「美味しかった」「また来たいわ」という思いを持っていただけるように工夫をしなければいけないよと、部屋の飾り付けもそう、すべて一つひとつをその時々によりきちんとしてやっていこうじゃないか、というふうにも心がけております。

いろいろ端折りながらのお話になりましたが、時間も少し経過しましたので、最後に一つお話しして閉じさせていただきます。

私たちの集落では毎月やった経過を、毎月 25 日に区の役員会という組織があります。そこに箇条書きですが全部コピーをして、何月何日にはどなたがお見えになってこんな話をしたということ報告をします。そうしますと柿野沢のセンターで役員会につながることもなんですが、1 枚 1 枚のコピーが各家に渡ります。そのへんが大事だと思うんです。情報の伝達ではないですが、やはり片手落ちになることがまま多い。ですからそんなことのないように、みんなきちんとしてどなたにでも分かっていたらいいような情報伝達が必要なのかなということを、最後になりましたがご報告をさせていただきます。まとまりませんが一応私のお話はこれで終わりたいと思います。

資料

ムトス柿野沢の紹介

はじめに

— 語り伝えられる先人の努力 —

柿野沢を語るには、昭和初期の公会堂づくりから始めなければならない。明治、大正の 60 年間に亘って、集落内に 2 ヶ所の神社があったことから、北部、南部の和が取りにくい所であったが、当時の人々によって集落の和をめざした公会堂づくりが始められた。集落内を北と南から歩数で測り、その中心に手作りの公会堂が建設され、地区が一つとなった地域づくりが始まった。戦後の昭和 21 年、地区の和は「柿野沢の道作り運動」として継承され、区の下部組織として、柿野沢道路委員会が発足、財産割りの資金と労力奉仕によって、手弁当道路 12,000 メートルが着工することになった。常に顔を見ながら汗を流すこの道づくりは、自ずから集落内の和を強め、また、集落内の都合の悪い家を互にかばい合う互助の精神が生まれた。

◆集落の概況

戸数 72 人口 275 人 65 歳以上の老人
 農家 63 非農家 9 耕地率 51% 林野率 41%
 飼料畑 9.0ha 水田 17ha 畑地 17.5ha
 1 戸平均 0.69ha 中核農家 6 戸
 重要農畜産＝酪農、肉牛、稲、果樹類、野菜類、花卉、花木類、エノキ茸等

◆農業の構造

団体営一般農道整備事業 昭和 48 年度より 1,125m の新設工事
 畜産基地造成事業 昭和 54 年度より 3 工区の圃場整備
 新農構環境整備事業 昭和 60 年より 3 工区の圃場整備
 簡易水道事業 2 工区、構造改善センター 1 件をそれぞれ整備

◆農業生産

柿野沢集落の中心となる作物は、酪農、肉牛、果樹（梅、柿、プルーン）であり、酪農、肉牛については専業農家となっている。
 労働力の分配と傾斜地利用から、柿、梅、野菜の生産を図る。
 無人販売所の活用、世田谷、渋谷、中京圏との産直交流のため野菜類の作付けを促進している。
 水田の農作業受委託事業により畑作目への労力分配が増している。

◆地域おこし

仲間づくりから発展した絆と、強い住民組織の活用 集落づくり＝人づくり
 お仕着せでなく自分たちで創り出し、解決の方途を探る
 婦人、高齢者の潜在能力の掘り起こし＋男性の協力 — 人おこし
 旗振り — 同調者 — 仕掛人 — 支援者 — 住民の後押し
 集落内の動向把握 むらの歴史を知ること 先人の努力

◆現在の活動

公民館活動、ムトスの精神、マネジメント事業推進、生産者組合
 各種団体組織、住民との連携
 正月全戸集合区民新年会から一年が始まる
 集落内 2 ヶ所の無人販売所の活用

和紙の手漉きと小学生への卒業証書

農産物加工と郷土料理「久堅御膳」の魅力

地元産大豆による「母さんの手づくり味噌」の加工・販売等

県外からの中学生・高校生他、一般グループによる農業体験・教育旅行の受け入れなど
経済行為を通じての人心のまとまり

◆農地の有効活用

中核的担い手農家育成を図るため畜産基地建設事業を実施し、地権者 30 戸の農地を中核農家に利用集積した。また水田等の作業効率を高めるために昭和 62 年より新農構事業（集落環境整備事業）に着手、生産基盤を整えた。投資された農林事業費は 11 億円余。整備された集落の大切な農地を有効活用のため農協の営農技術員、普及センターの訪問指導の下に農地の条件、環境を考え市場性の高い作目を導入、荒し畑の防止にも努めている。

◆コミュニティ・文化活動

地域内には婦人グループ、壮年団、老人クラブ、パーシモンなど、各種団体が組織され、活発な活動が行なわれている。これら公民館活動に加えて行政、南信州観光公社などと提携しつつ、県内外の中・高校生による農業体験教育旅行の受け入れや地元小・中学生を対象に「生きる力を育む景観形成事業への取り組みに向けて学習を高めている。

◆今後の課題

農村文化は道路からととらえ、三遠南信自動車道、国道 256 号線の改良促進を
マネージメント事業による営農システムの構築を促進
柿野沢にある資源をすべて生かす生活環境の整備促進を

◆自分たちの役割

自分たちの家に、子供たちの為に、将来に望み、夢、
相互扶助、自助努力
飯田基本構想への提言

(5)農業体験等の受け入れを通じた都市農村交流

「柿野沢生産者組合」が中心となって、愛知県足助町や東京都世田谷区、渋谷区でのイベントに参加し、五平餅や梅漬け、手作り味噌など柿野沢の特産物を販売している。

また、中学生などの体験教育旅行を平成 8 年から受け入れており、田植えや草刈りなどの農業体験、五平餅づくりなどの食体験を行っている。平成 12 年からは、渋谷区中幡小学校と「どんぐりの森小学校」による交流を行っている。これは、子供たちがどんぐりから発芽させた苗を、柿野沢区の里山に植え、その子供が大人になった時、自分の子供を連れてこの地を訪れるといった次世代へつなげる取組である。

【むらづくり推進体制】

□下久堅自治協議会

□柿野沢区
区長 (区のリーダー)
副区長

□区会(14名):むらづくりの最高意思決定執行機関
11組合

道路委員会(6名)

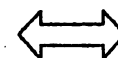
□公民館:地域行事の企画運営
文化委員会(12名)
体育委員会(12名)
各種団体
(老人クラブ、消防団等)

□集落振興会議(14名):農地保全・集落振興
柿野沢営農組合(46戸):水稻耕作調整
柿野沢生産者組合(72戸):農産物直売・加工・交流
中山間直接支払7団地(58名):共同作業・農地保全
柿野沢農作業受委託組合(46戸):作業受託
各種グループ
(こぶし会、生活改善グループ、若妻会)

□中山間地域総合整備推進委員会
:柿野沢の総合的な整備推進
景観保全委員会(10名)
特産物加工・活用委員会(10名)
農村・公園委員会(10名)
農業体験交流委員会(10名)

都市農村交流

交流・体験・直売



体験教育旅行
ワーキングホリデー
どんぐりの森小学校
足助町
世田谷区
渋谷区

(地震等災害防災協定)毎月
9/19防災の日 渋谷区野菜E

協力・支援



下伊那地方事務所

飯田市

下伊那農業改良普及センター

飯田市農業振興センター

㈱南信州観光公社

みなみ信州農協

集落複合経営

集落複合経営とは農業者のみでなく、その地域（集落）で暮らすサラリーマン・商業者・工業者など全ての人が、お互いの持ち合わせている物や知恵やお金を出し合って自らの手で地域を経営してゆくことです。

具体的に農業に於いては、一部分の専業農家の育成や経営規模の拡大だけを考えるのではなく、専業農家も一種兼業農家・二種兼業農家も含む、多くの農家の所得向上と、それぞれの向きに合った農業を続けてゆく姿をさします。そこでは、専業農家は地域のコーディネーターであり、兼業農家に対しては自立化・農業的環境の利用による複合化等の援助を進めます。また、この複合化のため、皆で農業的環境・風土をなるべく保全し、農業者にとっては生活・労働の場、その地を訪れる人にとっては憩いの空間となるようつとめる必要があります。

集落とは

ここで言う集落とは、柿野沢区が「一つのまとまり」であり、その中には4つの常会、11の組合から成る。

集落、区はもとより耕作者組合、区、区の連合体、学校区、旧村などそれぞれの地域の実状によって形成されてゆきます。また、この様な縦の組織だけでなく、特に柿野沢集落においては、区の自治行政下に、区長、副区長、区会議員、道路委員会（専門委員会）がまとまり、公民館、文化委員会、体育委員会、老人クラブ、中年会、消防団など各種団体が所属します。

更にマネジメント部会には活性化委員会ほか総ての生産部会、生活改善グループ等の団体、グループが具体的に連帯され集落内全戸を以って組織し、それぞれの機能を積極的に活用しながら、地域内にある人、物、知恵、お金、風土、環境などを組合せながら長い目で見て、住みやすい場をつくることで、元気で人づくり、地域づくりに向かって切磋琢磨することであります。

【まとめ】

白戸：これからは今のお二人のお話を受けながら、今日のテーマである「集落自治から見えてくるもの」ということで、少しご質問ですとかご意見なども含めて進めていきたいと思います。今日お二人にお話をいただいたなかで、最初に私の方から、私自身が感じたポイントみたいなものを出させてもらいまして、その上で話を進めていきたいと思います。

今回、お二人にお出でいただいたわけですが、一つは集落自治といったときに、最初に長谷部さんがおっしゃったように、集落の中には大変いけないというか、たとえば個人が束縛をされたり、あるいは目立つことがたたかれたり、閉鎖的であったりと、そういったいくつかの問題があって、それを認識をしてというか、それをきちっととらえた上でそれを乗り越えながら進められるということだと思います。

特にお二人の話のなかで、私が感じたのは、まずは実践活動がしっかりとされている。しかもそれが、いままでは中山間地を含めて、村づくり・地域づくりというものがどちらかというとイベントであったり、あるいは単なる交流であったりといったところからひとつ出て、経済的な価値をも含めた実践活動になっている。特にここ60年の集落の流れをみたときに、最初に長谷部さんがおっしゃったように、職業の「職」と住むという「住」が分離をしていて、集落の中から職というか、それで生きていく部分が村の外に出ていったことが、集落の機能を弱体化する一つの原因になったことを考えれば、それに向けて経済というものをきちんと見直していこうということが、私としては感じられました。

それからもう一つは、自治という言葉であります。集落の中で自治というのってたいへん聞こえのいい言葉であるのですが、私も自分の地域の中でいろいろ活動をしていくなかで、言い方はほんとうに悪いんですが、自治とはいやな人と一緒に生きていくことなんだなと、ときどき思うことがあります。いやな人という言い方は悪いんですが、要は自分と異質な人たち、自分と意見が合わなかったりする人たちとも一緒に生きていけるかどうか、そのためにはやはりきちんとした仕組みがあるんだろうなと。だからこそ民主主義だとか、そんなようなことが必要とされるんだと思うのですが、そのへんをきちんととらえながらやっていらっしゃっています。それから、とにかくこういう集落のことをやるとそういうもんだと、集落はそういうもんだと我慢しろということから出発するのですが、お二人の実践はそこのところをどう乗り越えていくのか、そこをきちんと考えられている、あるいはそれを学習し、あるいは実践を通して常にそこを意識されているということが、一つ学ぶべき点かと思いました。

それから三つめに、具体的な話とともに農業体験の話等が出てきましたが、農業体験ということで単に地域と都市の交流ということだけではなくて、明らかに自分たちの地域を含めて、あるいはもっといえば日本の将来の農山村を含めて、将来を見つめながらやっていらっしゃるんだなということを感じました。要するに単にやっているだけではなくて、日本の農業とか農山村をどう次代に継承していくんだということを、きちんとお考えになりながらやっていらっしゃるところに、私自身はたいへん感銘を受けました。

いずれにしても、私も信州に来て17、8年目になりますが、私自身が信州に来てひとつ大きく意識が変わったというのは、今日来ていただいています長谷部さんが、私が来て2年目だったと思いますが、長谷部さんがこうおっしゃったんです。「白戸君、地域をどうするかなんてオラ一辺も考えたことねえぞ。オレは地域で自分がどう生きるかを考えているんだ」とこうおっしゃったんですが、その姿勢をずっと貫かれているんなあということを、思ったということも、ちょっとまとめの一つとして付け加えさせていただきたいと思います。

私のまとめはそんなところですが、少し玉井先生の方でフォローしていただければと思います。

玉井：今朝の松本市はとても風が吹いて、私は5時にウォーキングに出たんですよ。あまり風に吹かれちゃって、魂がどこかに抜けちゃったんじゃないかと思うんですよ。どうも頭がうまくまとまらないんですね。このまま終わりになっちゃうかな、そういう状況なんです。

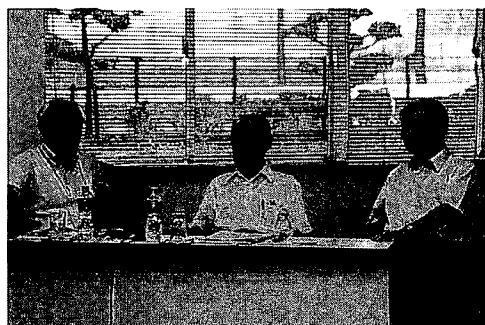
なかなかうまくまとまりませんが、お二人のお話を聞いていて感じるのは、日本全国どこでもそうですが、国があって、都道府県があって、市町村があって、そして各集落には自治会というのがある。これはどこでも同じようですけども、縦の線がピシッとしていて、中央でなにかやれば必ず行き渡るようにできているんです。そういう点で私もまた「まち」の住民ですが、町会というのがありまして、市町村役場の下に町会というのがありまして、私ども松本市には460町会があるそうです。こちらの方々も昔の村ですから、人口は約2千人くらいの地域です。そこには自治会があって、私どもと同じように自治会員になっている。ところがそれは上から下りてくるものをそつなくこなしていく、上意下達の機関なんです。その中のほほんといれば、とにかく無事に集落は動いていくわけです。ですから、この自治会というのは余計なことはやらないという建前になっているんです。余計なことは言っちゃいけない。

私はいつも思うのですが、これは聞いた話ですが、むかし千曲川の端の村々では、川流れ（水死者）が上の方から流れてくる。ああ気の毒だといって竹竿でこっちの方に引き寄せて供養などすると、村に余計な面倒がかかりますから、そういうことはしないんです。こっちの方に流れてきたら、そおと棒でつついて下の方に流してやるんです。そうして流れ流れて村は平静を保っているんです。あまり余計なことはやらない。また、村の中で余計なことをやると、ろくなことはありませんから、だから僕もまちの中に住んでいるんですが、余計なことはやらなくて、じーっとしています。

集落自治というのはそう意味においてはきちんとしているんですが、なかなか個人にはいきいきと伝わってこないんです。ところが、お二方になんて来ていただいたかという、それはこちらにも自治会というのはきちんともあるわけですが、上久堅にも自治会連合会というのがある、きちんとしているところは松本あたりとまったく同じなんです。ところがそれとは別で、自治会には手を出さない建前になっているんですが、そのところを「ひさかた風土舎」の人びとは、どういうふうに言ったらいいのか、自治会とは別だけれども、しかし自治会に付かず離れずなんです。各集落ごとにやっていくわけですから。

宮内さんのところもそうなんです。下久堅にも自治会があって、自治会連合会というのがあるに違いないんですが、しかしまた、宮内さんは個人的になんかやっているんじゃないんですね。これは集落の仕事としてやっている、あるとき私は宮内さんのところに行きましたら、大勢女衆が出てきて「ひさかた御膳」を作って対応してくださったんです。それは宮内さんが中心になって差配していらっしゃるんですが、立派な中年のおじさんがそこへ来て、少しなにかおやりになってお引き取りになったんです。その人が区長（集落長）なんです。私なんかは宮内さんが区長かと思っていたんですが、区長さんのような人が2人いると我々はおかしなことになるんですが、そこはうまく分担できているんですね。

ですから私に言わせれば、自治会とか自治会連合会というのはあまりなんかやらないところ、余計なことはやっちゃいけないところ。そのまんまだと、多くの自治会がそうであるように、なにもしないで次ぎに渡していくわけです。ところが下久堅では宮内さんがいらっしゃって、「ひさかた御膳の会」という女衆の集まりがあって、公民館とも違うし婦人会とも違うし、あれは何ですか？「生産者組合」ですか。それがあたかも区の自治会の中のひとつの組織のように不思議な活動をしていて、そしてきちんと成り立っているんですね。自治も行なっているんです。区というのはあまり余計なことを行なわないようにな



っているのは、たぶん松本あたりと同じと思うのです。二本立てになっているんです。

上久堅の風土舎も同じです。自治会では手をつけられないところ、しかしやらなければならないところはいっぱいあるんですが、自治会にはうるさい人がいっぱいいて、なかなかできないんです。風土舎でやっているんであれば、なんだか任意団体のようなものですから、いちゃもんを付ける筋合いもないわけです。あった方が便利だからお互いに認め合っている。これも二本立てになっている、まことにおもしろいんです。

皆さん頭を整理されてご質問をしていただければと思います。

白戸：それでは多少時間がありますので、ご質問やご意見をいただければと思います。

〔質問 1〕

木内：松本大学の木内です。「鎮守の杜構想」ですが、13の集落があるということですが、そうしますと1集落あたりは何世帯くらいになりますか？

長谷部：全体で500戸くらいですから、それを13で割れば約40戸といったところです。

木内：約40戸で3つの約束というのはかなり大変ではありませんか？ そのなかで実際の実行委員というか、核ができていのでしょうか？ それぞれの集落で。



長谷部：たとえば、この9月15日には「ひさかた火祭り」というのをやるんですが、火祭りには13の集落が全部御輿を作って、松明で行列をしてきて競演するんです。農村広場に13か所から集まってきて、その御輿は毎年それぞれの集落で火を付けて焼いてしまう御輿づくりをするんですが、それを私どものように70、80戸という集落もあれば、20戸という集落でも全部御輿は担いすることはやっています。かなり限界にきているところはありますが。それからあと、実践グループはそれぞれの集落には必ずといっていいほどありますが、ただ活動のほどは活発のところもあれば、それほどでないところもあります。

〔質問 2〕

小松：小松と申します。ムトス柿野沢の状況につきまして、この集落の状況、戸数が72戸、人口が275、65歳以上の老人が何%かは書いてないんですが、ちょっと気になるんですが。

宮内：65歳以上は85人です。そうしますと全人口の約30%です。

小松：それと耕地率が51%で、林野率が41%ということは、非常に土地が平らでいいというイメージを受けるんですが。

宮内：いや、よくはないんです。

小松：それともうひとつ、総面積は水田が17ha、畑が17.5ha、これで農家が63戸ということで、1戸当たり0.69ha。（宮内：昔でいう7反百姓です。）この水田と畑の面積を合わせても35ha、35haということはいまのヨーロッパの一農家の耕地面積ですね。昔の5反百姓に毛の生えたくらいで、それで今後の国際化時代の中で、こういう少ない面積の中でこれだけの農業人口を抱えていくことについては、非常に問題があると思うのです。やはり、産業構造を少し考えなければいけないではないかと思うんです。

宮内：ごもっともなご意見だと思うんです。ですから私たちの方では集落運営委員会という組織がありまして、先ほども申し上げましたが、都市交流による方法と、外貨、出稼ぎの人口ですね、

780人弱の人間の中でいま農外収入を得ている人口が130人あります。農外収入の占める、外からお金をいただいているのが、家計に大いに与っています。

小松：私はやはり、こういう地方にもそれなりきの工場誘致だとか、そういうことを考えて産業構造を変えなければ、将来はないんじゃないでしょうか。

宮内：難しい問題だと思いますね。

小松：私は難しい問題だとは思っていません。当然、基本的にこの面積でこれだけを抱えていくのはやはり無理ですよ。それは結局、政府の補助か、都市の補助によって生きていくだけであって、まさにいうならば、あまり言葉はよくないが、「寄生的」農業だと思います。やはり根本的に考えてもらいたいですね。私は長い間都市のサラリーマンをやっていますが、農村、農村といいますが、実際に今の日本の農村というのは都市労働者のお陰で生活しているようなもんですよ。自民党の政策も悪いんですが、こんな狭い面積でやっていこうということに、やはり根本的に無理があるように思います。

宮内：ご指摘ありがとうございます。私たちはたとえば工場誘致だとか、そういうことにあまりこだわを持ちません。ただ将来をみたときに三遠南信高速道路ができて、おそらくは人口の確保はあまり期待できないと思うんです。ですからそういうようなものに期待をするのではなくて、へんな言い方ですが、私たちはもう農業がいやで外に出る人があれば止める必要はないだろうと、なにもこだわりません。工場誘致もさることながら、工場を誘致したときに、その雇用をどうするかといった悩みの方がたいへんだと思いますし、現に飯田が遠山郷を入れても10万6千人の人口で、悪いんですが10万6千人の食べる米がもうないんです。7月一杯でもう終わり。ならば米を生産地から輸入しなければしょうがない。そんな無理はするべきではないということを、私はへんな逆説ですが地域では申し上げています。

ですが41%と51%の比率の中で、まだ手だてする方法は何か出てくるであろう、ということを考えています。ですからこれは私個人の思うことであって、まだ集落営農との中でもチラチラ出る話の中で、そういうことにこだわりを持つ人たちもあります。だからもっと言えば50歳代でも農業がいやだという人はいま一人もいないということ、むしろ高齢者になって農地を売却するという人もないわけです。そうすると賃貸借でもって農地を確保しようとする、利用集積をしようとする農家はあります。なったときそれではどうするかというと、農業委員会が動き出すと思うんですが、10a当たりの賃貸借はだいたい7,000円から10,000円が限度である、というような見方がありますので、今のはご意見としてありがたくいただきますが、今のところ私どもではそこまでは、生きるとか生きないということは言いきれない状態にあると思っています。

ですからもういったんは、定年までは外に出て稼いでくれ、農外収入で稼いでくれ、けれどもそれ以上年を取ったら、寝ぐらはここにあるんだよという考えで地域に帰ってもらって、各地域の確保は十分やっていけるだろうと、進歩がないといわれればそれまでですが、私たちはそこで生き延びていこうと思っています。

【質問3】

加藤：本日はこのオープンカレッジに初めて参加させていただきます上伊那の南箕輪村の役場の、総務課長の私加藤と申します。松本大学は根本先生を中心に、福祉でいま協定を結んでいたいへんお世話になっておりまして、この席を借りてお礼を申し上げます。

すこしお二人に聞かせていただきたいんですが、いま私どもの南箕輪村は人口1万4,500人、高齢化率10%、長野県一若い村ですし、長野県一大きな村であります。3年前に自立を決めたときに、合併論議がありまして、いま自立の関係の自助・共助・公助の話もございました。

最初に質問だけ申し上げたいと思いますが、お二人はこれからどういう跡継ぎをつくっていくの

か、そこをちょっとお聞かせいただきたいと。長い間、自分たちお二人が中心になってやってこられた、これを次の世代にどう引き継いでいくか、そのコツを教えていただきたいと思いますし、そういう後継者が現実にいるのか。

最近、「限界集落」といういやな言葉がじつはあります。これは国が、政府が言っている言葉ですので、これをどうするか、これから道州制ということで、非常にまとまりを大きくしようというのがいま国の基本的な考え方であります。私も地域の住民でありますしわたしは南箕輪に生まれ、南箕輪に育ち、南箕輪の行政を担当しています。ずっと南箕輪のことを一番知っています。しかし、いま南箕輪村というのは、伊那市、それから箕輪町、長野県下でも急増激しいそのまん中にあり、飯田でいうと県と同じ状況です。



そういう中でいま村が、村づくり委員会が今夜もありますが、この地域おこしをどうしていくかという議論を每晚しております。こういうことは、私はやはり小さい単位からやるべきだと思っておりますが、いま一番私どもの村で問題になっているのは、だぶんお二人の地区でいう組さえない。これが先ほど情報の共有というお話もございましたが、一切組に入らない。自分は世間からいろいろ干渉されたくないというのが、非常にいま若い者の考え方だと思います。だから空き缶拾い、ゴミ拾い、道路清掃をやっても出てこない。

これは地域の生活リズムも、夜間お仕事をされる人もありますしいろいろで、非常に生活のサイクル、仕組みが変わってきているのも事実だと思います。しかし、これをどうしていくかというのが、いま南箕輪村が一番大きな問題として抱えている問題であります。いまやはりお二人がおっしゃられた、地域の中でだれかバカ、という言葉は失礼であります。オレがやってやるという人が出てこない、なかなか元気づくり、村に活気というのは出てこないと思います。これは充分私どもも、全国のそういう地域に行きますと、村が元気、地域が元気というところは、もうなにかをしなくてはならないというところから元気が出てくる。

南箕輪村はなにをしなくても、もう企業は来るは、いろいろな商店は来るは、コンビニはあるは、村の財政も非常にいい状態です。それだけに横のつながりが非常に希薄になってきています。そこでどうやってまとめていくかというのが、私行政の立場として非常に難しい立場で、毎日議論しているのです。

先ほど言いましたようにお答えを、自分たちがやってきたんですが、その後継者づくり、跡継ぎはどういうつくり方をして、そういうものがいま育ちつつあるのか。この高齢化率が先ほど30%と言いましたが、年々この地区集落が魅力がないと若者が戻ってこなかったりするんですが、そこらへんをどういうふうにとらえているのか、ちょっとお話があったらお聞かせいただきたいと思います。

長谷部：私は考えていません。というのは、いつも、私どもに視察が来たり私が行くと、後継者はあるかと言われ、「後継者はありません」。というのは、地球と同じようにビッグバンで生まれて、ハレー彗星のように消えていく。というのは、私はいくつかの組織に入っているけれども、最初につくった思いの人がそのままいくわけです。後からという人は絶対というくらい入ってこないんです。たとえば農業を考える会は34人で出発しましたが、いま6人になりました。私が50歳代で立ち上げたんですが、いま50歳の人にそういうことを、後に非常にいい、たとえば市場といいますか販売の場所ですね、飯田の一等地にこういうものが売れる場所を確保しているんで、ぜひ続けてほしいといってもやる人はいません。ですからこれはしかたなく消えていくかと、こういうことです。ですから対策をどうするかということは、それは行政が考えるかもしれませんが、私ども住民ではそれは考えられないということと、そういう姿を見て、ああ、やりたいという人が出てくるか

もしれないという期待はある。こういうことは伝統や風土だと思っている。そういう風土をつくっていく努力をしなければいけないと思いますし、そういう伝統を守ってほしいという希望はありますが、私どもはあえて自分たちで後継者をつくるということは、空しくてできないという今の状況であります。

宮内：私からですが、長谷部さんと共通するところはあります。家の後継者がありますが、農業の後継者は減ります。これははっきりしています。先ほども申し上げましたが、私たちは共同作業の共同経営、それから結（ゆい）でいきます。それは昔、江戸時代にあった五人組の冠婚葬祭単位の地域、5軒か6軒ひとつの組合組織で充分いけると思っています。仮のその6軒が半分の3軒になってもいけるのではないかと。現に今こういう例があります。私どもの地域で、木曾の長男が集落に来てくれて長女と結婚しました。けれども木曾は木曾でやっておられるし、こちらはこちらでやっています。けれども将来の農業経営ということになれば、今の交通便利のいいことを考えれば、また新しい方法も出てくるのではなかろうかというふうに考えています。ですから、今ははっきりは申し上げられませんが、もう一度基盤整備なるものが必要なときに、私の集落にもくるのではなかろうか、そして機械力による農地耕作、農作物収穫というものがもう一回必要ではなかろうか、これは東京農大の小泉先生の話が一部は入りますが、私自身もそうも考えるところもあります。

現に私の家なんかもそうですが、将来、まあ息子たちは夫婦でやる気でやっていますが、二人とも勤めております。けれどなったときに、中心になって農業経営ができるかというと、これは100%できないとみています。野菜の種すら播けないというふうになって来ましょうし、自分の孫たちもおそらくそれは不可能である。けれどもそこで文殊の知恵で、とにかく一家の農家の中で複合した農産物を作るということはできない時代が来るであろう。だから私は米作りでいく、私は野菜作りが好きだから野菜でいく、というような方向。

現に無人販売所を見ていると、販売所が一種の市場になっています。それから技術の交換所です。たとえば、Aさんがいい瓜を出した。するとBさんが「Aさん、この瓜はどんな格好で作ったんですか？」と聞く。今までの農家の心理ですと、なかなか自分の技術を教えるにこなかった。ところが最近の理解ですので、いろんな意味を通じて教えてあげる、教えてもらう、というようなことができてきた。それがあい助ける互助の精神ではなかろうか、ですから山間地の農業経営でしたら、もうこれが絶対的なものであるのかなという、そういう時代が来るような気がしております。

〔質問4〕

佐々木：時間になりましたのに申し訳ありません。安曇野市の穂高から参りました佐々木と申します。今日は本当にありがとうございました。いま皆さんの質問も含めながら非常に考えることが多かったと思います。私自身もアルプス女性企業家会議というひとつの団体に所属しておりまして、やはり地域づくりの学習とか自分たちの目標も人間づくりということで、考えている中の一人なんです。いま玉井先生のお話がありました自治会は流れるようになるにもやらずという中に、ひとつの別の団体が活動をしている。そういうなかでも、上久堅の長谷部先生は、司会の白戸先生から「地域で自分がどう生きていくかを考えていく」というその一言が、というお話がありました。私もそれなんだと、すごく感動をいたしました。下久堅の宮内さんからは、県外からの体験学習を受け入れる制度があるとお聞きしましたが、県内からも受け入れていただけるのでしょうか？ ぜひ自分たちの地域の小さ



いところから、私たちもなにかできるものをまず自分から、地域の仲間からなにかをしていきたいなという実感のなかで、ひとつ質問をさせていただきながら、我々もできるということにすぐ勇氣づけられました。本日はありがとうございました。

宮内：先ほちょっとお話の中で落としたんですが、いまのお話がそっくりそれに当てはまるかわかりませんが、実は私のところでトンネルが一つ 10 年ほど前にできたんですが、トンネルの残砂をもって一つの洞が埋まりました。それが面積で約 40 a ちょっくらいなんです、8 月 27 日にこちらから中央高速を行きますと（首都高に入ってから）新宿の手前に幡ヶ谷という降り場があります。その左側に、徒歩で 7 分くらいのところに中幡小学校というのがあるんです。これは渋谷区です。渋谷区の小学校 6 年生がその山へ来て、ドングリの苗を植えるんです。それがひとつの「どんぐりの森」ということで（お手許の資料に）紹介してありますが、8 年目になります。

5 年目のときに私たちの地区の下久堅の小学校の 6 年生となにか交流ができないものかなということを地元の校長先生に申し上げました。すると学校行事もあることだから、すぐ来年というわけにいかないだろうけれども、やがてそういうこともいいんじゃないですかということになりまして 3 年目から、飯田市は 6 年生の修学旅行は東京の見聞を広める、ですから渋谷の子供たちはこっちに来てどんぐりの森をつくるというよなことで交換できるようになりまして、渋谷区教育長さん、それから教育庁の皆さん、それから区長さんもつい先だっても見えました。そんなようなことで大人たちもそれに合わせて交流もできます。

まず第一には、私たちのところに来て、ドングリの種を拾う、それを持って行って教室でプランターに播く、芽が出たものを翌春畑に出す。その中幡小学校は校庭の隅に 7 か所の野菜作りをしています。呼ばれていったところが、都会の子供が畑と英語とコンピューターということをやっています。呼ばれていったところが、都会の子供が畑と英語とコンピューターということをやっています。呼ばれていったところが、都会の子供が畑と英語とコンピューターということをやっています。呼ばれていったところが、都会の子供が畑と英語とコンピューターということをやっています。

ですから今度も 27 日に来ますと、まず両方の子供たちが合わさって五平餅を作って体験をする。それから間伐材で出した檜の丸太を、ダンプ 1 台が向こうから向かえに来る。そのダンプに間伐材を乗せて行って、東京の子供はなにをするかというと、畑のまわりに囲いをして、その中でなにか考える。というようなことの繰り返しをこれからも続けていく、という格好でいま望んでおります。

白戸：時間も一応参りましたので閉じたいと思いますが、今日の学習会については、特に先ほどもご意見があったんですが、農業というものと農というものは、長谷部さんの方で最初にお話いただきました。産業としてとらえるときの農業というものと、それから中山間地の位置を含めたものとして農というものがあると思うんです。日本というのは産業を中心としてやってきた社会ですから、競争力の低い農業というのは横に置かれて、その分は外国から輸入をする。ところがいま現在、日本は世界の食糧の 4 分の 1 を輸入して、そして人口比で考えると 40 倍食べていると、みんなドラム缶になってもおかしくないですが、ドラム缶になっていないということは、だいたい 1 年間に日本で穫れるお米と同じくらい残飯を捨てている。世界の中で何百万人という人が飢えて亡くなっているにも関わらずにです。そういうことを我々はやっているんです。そこをもっともう一度、農というものをきちんと考え直さなければいけないじゃないかなというふうに、私は今日お話を聞いて感じました。

フランスとかイギリスとかヨーロッパの各国でも、食糧自給率が 100% から 200% いてるところもあります。それは農業としての業ではなくて、あるいは食糧は自分の国でちゃんと生産してほかの国に迷惑をかけないという、その部分を大事にしている。そのへんの議論がたぶん足り

ないのかなあ、それをきちんと議論しないと、今回のこういう集落が存続するかどうかということにも関わる。集落だけでなく中山間地もです。この新村は奈良・平安時代からずっと米を作ってきたところですよ。構造改善をしても田んぼの形が変わらなかったということで、日本一の米作りが3人も出ている地域です。けどこの地域でさえ後継者がいないんです。この地域もあと何年か経てば農地がなくなるということになっていくということなんです。これはなにも中山間地の問題だけでなく日本全体の問題として、そのなかで今回のお二人のなさっていることはたいへん意義のあることではないかと私自身は思っています。

もう一点だけお話しさせていただくと、集落のあり方、コミュニティのあり方というのは、それはそれで若い人あるいは女性たちにとって、居心地のいい場所ではずっとなかつたと思うんです。そのライフスタイルとか価値観が変わるなかで、若い人たちも外に出ていった。たぶん昔に戻ろうというのは無理なんだと、集落を昔に戻そうというのは。昔に戻すんでなくてももう一度新しいかたちに作り直していくということだと思ったときに、今回のお二人のお話にあったいろんな取り組みというのは、共通のプロジェクト、女性男性、新しい人古い人、関係なくみんなと一緒に同じ目線のできる一つのヒントになるんじゃないかなというふうに思います。

じつは私どもの大学で、松本駅の西口の町づくりに関わっています。高齢者が60%、3分の1が駅の建て替えでいなくなってしまった。その3分の2の残ったお年寄りが集まって、しかし、このアルプスの景色を残したい。誰もそんなものができるとは思わなかったです。人口20何万の都市の駅前にビルが建たないなんていくことはありえなくて、あつという間に年寄りも駆逐されて、高いビルが建つだろうと思われていたら、結局建ちませんでした。いま松本駅のアルプス口から見ていただくとマンションが一つボコンと建っているだけです。それ以外はとうとう建たなかったです。なぜか、それは土地を売らなかったんです。地主教育という言葉を使いました。

でも、それを見たうちの学生がなんて言ったかというのと、「町づくりって大変なことだと思っていただけれども、先生あれだね、人の心が変わるとのことだね」と言いました。人の心が変わるということは、どこで変わるかというのと、たぶん今回お話しいただいたような取り組みの中でしか変わらないであろう。机の上で、本で、話で変わるものでなくて、実践の中でたぶん変わっていくんだろうなと思います。

私どもの大学も7年経ちますが、地域の若者を地域で育てて、地域に返そうというキャッチフレーズで始めました。初めの4年間は本当に苦労しました。そんな地域に帰ろうというような若者はいなかったんですが、ここ数年で我々現場の中でいろいろすごく変化を感じています。ある教員が言いましたけれども、かつて田舎の若者は田舎がいやで都会に行った。でも都会で一人で生きていられないから会社という村をつくった。ところがその村がこのところ壊れ始めてきた。リストラという名前で放り出されたり、大きな立派な村だったのがある日突然つぶれるというようなことがあったり、村を引退しても年金というかたちで隠居生活もできたんだけど、それもできなくなってきた。そのときに新しい村をどこにつくろうかと、みんなうろうろしているんじゃないか。それをたぶん若者たちは感じ始めているんじゃないか。良い方向にあるものと、しかしながら依然として厳しい現実と、そのなかで我々はそれでもあきらめないでやらなければいけないなということを、私自身も今日強く感じさせていただきました。

この次の10月25日の研修については、下久堅にうかがって今日話題となりました「ひさかた御膳」をいただいたり、長谷部さんの上久堅の公民館の方で集落の方たちと色々なお話をさせていただくなど、あるいは遠山郷の方にも足を伸ばしたいなと思っていますので、ぜひお時間をおつくりいただいてご参加いただければと思います。

ということで、今日の地域づくり学習会はこれにて閉じさせていただきたいと思います。長い間皆さんのご静聴ありがとうございました。